

未来を担う力を育む保幼小・小中接続のあり方

— 0歳から15歳までの「学びのつながり」づくり —

福井県敦賀市教頭会 敦賀市立角鹿小中学校 小島 義和

1 主題設定の理由

敦賀市の学校教育は、「知勉強して考える力」「徳内面を豊かにする力」「体たくましく生きる力」「人と協働する力」を付けたい力とした「敦賀市『知・徳・体』充実プラン」によって、地域に根ざした系統性のある学びを推進している。この展開にあたっては、0歳から15歳までの「学びのつながり」づくりのため、発達段階を意識した校種間の連携を重視している。

敦賀市教頭会としては、本プランの充実に向け、関係諸機関と連携しスムーズな保幼小の接続と小中一貫教育を推進し、教員同士・子供同士がつながる仕組みづくりに取り組んできた。そこで、これまでの成果や課題を再確認し、さらには、現在そして未来の私たち教職員に求められる「働き方改革」や「新しい学校生活様式」を、どのように保幼小・小中接続のあり方に生かすことができるかについて検討するために、本主題を設定した。

2 研究のねらい

本市には「学びのつながり」づくりを目指して生み出した様々な仕組みや、積み上げてきた事業がある。これらを振り返り、市教頭会としての「保幼小及び小中接続」における「教員同士・子供同士がつながる仕組みづくり」の在り方が、校種の違う教員同士や学校・校種の違う子供同士に「つながりのムダ」をなくしつつ「協働する力」を育てているかについて明らかにし、持続可能でより確かな「学びのつながり」の実現を目指す。

3 研究の経過

(1) 教員同士・子供同士の「学びのつながりづくり」について

- 関係諸機関との連携
- スムーズな保幼小の接続
- 全ての学校での小中一貫教育の推進

(2) 施設一体型小中一貫校（パイロット校）設立に向けて

4 研究の概要

(1) 教員同士・子供同士の「学びのつながりづくり」

① 各小学校区単位での保幼小接続事業

ア 市保幼小連携推進会議：小学校区単位

年3回、県保幼小接続推進計画に則った「スタートカリキュラム」を作成。また、園・小学校双方の推進委員が関連研修に参加。

*教頭会にて会議の日程・内容をマネジメント

イ 小学校見学会：全市小学校一斉

2月に入学予定園児を小学校に招き、学習や生活の様子を見学したり、児童と活動したりする場を設定。

*教頭会にて各園の要望を集約し、ポイントを明確化し、一斉実施をマネジメントする。

ウ PTAとの連携

「給食試食会・見学会」を実施し、保護者の疑問や不安を解消する機会とする。また、保護者の経済的負担の軽減のため、制服やランドセル、教材等のリサイクル活動を行う。

② 各中学校区単位での小中接続推進事業

ア 小小・小中連携合同授業（8月・1月）

「中1ギャップ」の解消のため、6年生児童を入学予定の中学校へ集め、授業を体験。小中の教員が協力して仮クラスを編制する。2時間の授業を、小中の教員が1時間ずつ受けもち中学校の学習につながる小学校4教科の発展的内容を扱う。また、2回の中で、全児童が中学校の英語教諭による授業を受ける。

*校長会が実施時期を決定。市教育力向上会議の決定を受け、教頭会にて各中学校区単位で研究推進委員会を立ち上げて運営する。

イ 「小中一貫カリキュラム」の活用

市の教科指導員・研究員が中心となって、市教委の指導助言を得て作成している。このカリキュラムは、小中の学びの連続性と均一な学びの拠り所となっている。

○全国・県・市それぞれの学力調査等の結果をもとに児童の強みや弱みを分析し、小学校3年生から中学校2年生の間で留意すべき学習内容を明確にし、指導案を作成。教員の経験差に関係ない授業の質の実現を目指す。

○教科指導員・研究員は小中学校間を行き来し、教員の授業・指導をサポート。中学校入学に対する学びのつながりの構築と、教員の指導向上の働きを担っている。

*各校教頭が窓口となり、指導員・研究員と指導内容や日程等について調整をする。

ウ 市小中接続支援員のサポート

市小中接続支援員が毎週小中を行き来して、情報共有を行う。

*教頭会の中学校区別部会で日程・支援内容をマネジメントする

エ 部活動見学会（11月）

児童が保護者とともに中学校へ出向き、部活動を見学できる期間を設定。

オ 新入生体験入学（3月）

小学校卒業後に、入学予定の中学校で実際の中学校生活を体験する。また、テスト等で学習状況を把握し、指導の参考にしている。

カ 小中連絡会

体験入学後、6年生担任教諭と中学校教諭との間で個別の情報交換を行う。

*エ～カにおける教頭会の主な働き

○「中学校区単位の研究推進委員会」を組織。事業全体の進捗を掌握し、関係機関との連絡調整を行う。

○中学校区間で取組内容に差異が生じないよう、月1度の教頭会で調整を図る。

(2) 施設一体型小中一貫校（パイロット校）の設立に向けて

☆児童・生徒数の減少と角鹿中学校の校舎老朽化を背景に、ボトムアップ〔地域・市民等の有識者会議からの提言〕で実現

*統合される小中4校の校長会、教頭会を毎月設定。開校に向けた様々な準備を進める。進捗状況を市の教頭会で報告し、他の施設分離型小中一貫教育校と成果と課題を共有する。

① 小中接続を意識した主体的な学びにつながる「めざす生徒像」の追及

中学校区の教職員、保護者、地域住民によ

る研究会議を組織し、「めざす生徒像（15歳の中学卒業時）」を決定し、共有した。

② 戸惑いを減らすための環境作り

小中合同教育相談担当者会議において、児童・生徒の持つ課題の見つけ方と対応方策について共有化を目指し、マニュアルを作成。

③ 特色ある異学年交流活動

小中連携授業はじめ、小中座談会、中学生による清掃指導、小小合同授業、小中合同合唱、児童会・生徒会交流、幼・小・中合同避難訓練、4校合同のPTA活動と、あらゆる交流活動を展開した。文部科学省の調査官から「学校、保護者、地域が同じ方向で、子供たちを伸ばしていこうとしている点が大変参考になる」と評価された。

④ 「ポジティブ教育〔レジリエンス教育：逆境に負けない回復力を持つ心を育む教育〕」の9年間のカリキュラムづくり

5 研究の成果と課題

これまでの積み重ねにより、保幼小、小小・小中接続推進事業は、十分に定着し、特に「新たな不登校防止」と「学びの継続性確立」に効果が見られる。また、施設一体型小中一貫校設立に向けた取組みは、令和3年度の開校前から十分な役割を実現してきた。

しかし、令和元年度末からの新型コロナウイルス感染症拡大により、いくつかの事業がストップした。また、新しい生活様式の確立を求められ、教頭の職務も多種多様化および肥大化している。

このような中、今後も校種間のスムーズな接続を保ち、激動の時代を生き抜く子どもたちを育てていくためには、これまでの取組を見直し、洗練していくことが必要である。

また、その際に「働き方改革」「教員の負担軽減」の視点も持たなければ、教育活動に不可欠な「つながり」を極めることが困難になる。現在は、リモート会議等、いくつかの「新たなつながり方」と効率化が実現している。保幼小、小小・小中接続においても、新たなつながり方の模索の継続が必要である。既存の組織を活用し、何ができるのかを議論し、一つでも多くの対応策を実現していきたい。